2012 年パレスチナ・オリーブ収穫プログラム
報告書

2012 年 10 月 13 日～10 月 17 日

Olive Picking Program in Palestine

The Joint Advocacy Initiative
of the East Jerusalem YMCA and YWCA of Palestine

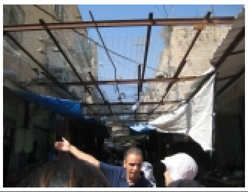
派遣事務局（日本）：日本 YMCA 同盟、在日本韓国 YMCA

【プログラム】

2012 年度パレスチナ・オリーブ収穫プログラムは、10 月 13 日～22 日（10 日間）で実施され、参加者は 15 カ国 82 名でした。大学生から 70 歳代までのグループは、ホームステイをする人たちと、ホテル宿泊をする人たちと、2 グループに分けられ、プログラムは夜のオプション以外は別行動でした。

今回、アジア地域から 1 名の日本人参加で、プログラムの前半の 4 日間、プログラムに参加し、5 日目に東エルサレム YMCA を訪問しました。

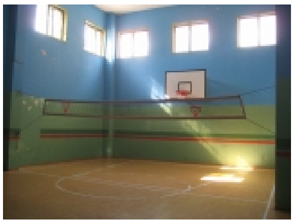
DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
10/13(Sat) 2:10 5:00 6:00 13:00 20:00 21:00	 イスラエル・テルアビブ国際空港到着 空港からパレスチナ・ベイトサフールへ移動 ホテルチェックイン 仮眠 ホテル周辺散策 軽食 ベツレヘム観光 夕食 オリエンテーション 就寝 *オリエンテーション* （ゴールデンパークホテル宿泊）	 質問攻めの入国審査である。 2 つのホテルに分かれて宿泊する。 すでに到着している参加者たちとベツレヘム観光を行う。 ホテル宿泊組とホームステイ組と 2 グループに分かれて行動する。
10/14(Sun) 7:00 8:00 8:30	 朝食 ホテルからベツレヘム西 Al Khader のオリーブ畑へ移動 オリーブ収穫開始 	 チャーターバスにオリーブ収穫用道具を積んで畑へ向かう。 畑は、両国を分離する巨大な壁のすぐ脇にある。参加者はオリーブを収穫しながら、互いの自己紹介を行ったり、母国での活動やパレスチナ問題についての意見を交わす。

DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
12:00	昼食	農家宅で昼食を食べる。
13:00	キャンプアイダへ移動	
	キャンプアイダの成り立ちと現状を学ぶ。 	キャンプ内、及び、キャンプに隣接する分離壁を見学する。 多くの難民は家の鍵を持ったままであり、キャンプゲートには大きな鍵のモニュメントがある。 分離壁には多くの活動家が描いた絵がある。また壁には難民となった人たちに起こった出来事が記されている。
15:30	ベツレヘム観光	
	聖誕教会他	観光地であるベツレヘムは多くの外国人で賑っている。私たちも聖誕教会他を訪ねる。
16:30	ホテルに戻りフリータイム	
18:30	夕食	
19:30	オプション①	2009/12/11 パレスチナのキリスト教指導者の声明で、世界の教会に支援を訴えたものを「カイロス・パレスチナ」文書と名付けられている。
	「カイロス・パレスチナ」を学ぶ	
	就寝	
	（ゴールデンパークホテル宿泊）	
10/15(Mon)		
7:00	朝食	
8:00	ホテルからヘブロンへ移動	
9:00	ヘブロンの歴史と現状を学ぶ	イスラエルの占領下にある旧市街地を歩き、人びとの暮らしを知る。
	（景観を再建する活動を学ぶ）リノベーティング 	

DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
	   ヘブロンの旧市街地散策	イスラエル軍の検問所はＸ線を通らなければならず、イスラエル当局が支配する地区にある小学校へ通う子どもたちも１日２回は検問所を通っている。 旧市街地では１階がパレスチナ、２階以上がイスラエルという建物があり、上階からの嫌がらせが横行している。
12:00	昼食 アブラハム・モスク他 ガラス・陶芸工場見学 	アブラハム・モスクには、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の祖である、アブラハムとその家族たちが埋葬されていると言われる。モスクはムスリム・パートとイスラエル・パートを分けられ、それぞれに検問所があり、Ｘ線を通る。 西岸地区第２の都市ヘブロンは、西岸地区の経済の中心地であり、昔かガラスや陶芸が盛んであり、鮮やかな色彩の陶器が並ぶ。
18:00 19:30	宿泊ホテル移動 夕食 フリータイム 就寝 （サハラホテル宿泊）	

DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
10/16(Tue) 7:00 8:00 9:00 12:30 13:30	朝食 ホテルから Jab’s のオリーブ畑へ移動 オリーブ収穫開始 	教職員ストライキで休校となった子どもたちも一緒に収穫を手伝う。途中、イスラエル兵士に収穫作業の中止を求められたが、続行する。オリーブ収穫作業も2日目となると、参加者も作業に慣れ、暑さを上手く逃れながら作業を楽しむ。時には歌が聞こえたり、子どもたちの笑い声が聞こえたり、実り多き時間を農家の人たちとともに過ごす。
	昼食 分離壁や土地収奪の状況を学ぶ 	畑で昼食を食べる。 分離壁が法律で定められたグリーンラインを越えて建てられていることや入植地や入植者が増え続けている西岸地区の状況が紹介される。
18:30 19:30	夕食 オプション③ 11 月にブラジルで開催される「世界社会フォーラム・パレスチナに自由を 2012」を学ぶ 就寝 （サハラホテル宿泊）	 フォーラムに参加するグループからのプレゼンテーション。

DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
10/17(Wed) 7:00 8:50 9:00 10:00	朝食 ホテルからベイサフール YMCA へ移動 JAI 事務所にてニダール氏と面談 	Joint Advocacy Initiative 事務所でマネージャーの Nidal Abu Zuluf 氏に会う。オリーブキャンペーン、ユースプログラム、ボイコットプログラムなどを手がける。ユースの育成、特に国内外のユース交流に力を注いでいる。
11:00	リハビリテーションセンターにてナダル氏と面談 センター施設見学 ベイサフール YMCA 敷地内見学 オリーブ植樹・移植、ゴット一他 	リハビリテーションプログラム責任者の Nader Abu Amsha 氏に会う。日本からの訪問を大変喜んでくださり、日本の仲間のことを親しく語るのが印象的である。イスラエルとの紛争による心のトラウマケア、障がいを持つ人たちへの就業訓練、紛争に巻き込まれた子どもや若者、そして家族がいかに日常生活を取り戻すことがきるのかに取り組んでいる。世界の YMCA や災害被害支援を行う諸団体と交流を持っている。 庭にはイスラエルにブルドーザーでなぎ倒されたオリーブの木が移植されている。また、小さな洞窟（grotto）がある。遠くの丘には巨大な入植地が見える。
11:30	昼食	

DATE TIME	PROGRAM	COMMENT
13:00 18:30 19:30 24:00	東エルサレム YMCA へ移動 総主事アンドレ氏と面談 東エルサレム YMCA 施設見学  宿泊ホテルへ移動 夕食 オプション④ ボイコット運動を学ぶ ホテルからイスラエル・テルアビブ国際空港へ	総主事 Andre'Batarshe 氏、また、来日経験のある Elham Salameh 氏と会う。4 ケ所の拠点では、①リハビリテーションセンター、②職業訓練所、③リーダーシップ研修、④スポーツセンターが地域のニーズによって設けられている。 地域に根付いた活動を行い、周りからの信頼も厚い。また世界の YMCA とのつながりを大切にしている。パレスチナが置かれている状況を一人でも多くの人たちに伝えることに力を注ぎ、子どもたちや若者の育成が未来への道と発信を続けている。
10/18(Thu) 01:00 01:30 04:15	 空港到着後、荷物検査 チェックイン テルアビブ国際空港からオランダ・アムステルダム経由して関西国際空港へ	 テルアビブ国際空港に入る直前の検問所は、タクシーから降りての荷物確認がある。

【参加者感想】　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸 YMCA　永井道子

神戸YMCA国際協力募金から、パレスチナに正義ある平和と希望が訪れることを願って、「オリーブの木キャンペーン（Keep hope alive）」に、日本 YMCA 同盟を通じて、毎年、募金を送っています。2011 年度、神戸 YMCA 創立 125 周年記念には、オリーブの木 100 本分の募金を送りました。パレスチナの人々にとってのオリーブの木は、長い歴史のなかで世代を通じて大切に守り育てられてきました。しかし、イスラエルの入植地拡張により強制的に根こそぎ引き抜かれ、危機的状況にあります。平和と希望を願って世界の人たち

が支援するYMCAの活動に参加したいと願い、今回の参加となりました。

9月中旬、オリーブ収穫プログラムの案内が届きました。プログラム開始まで1ヶ月に迫っていました。案内には、「プログラムには欧米を中心に世界中から参加者が集ります。日本からの参加者を募集します」の一文が目に留まりました。過去、神戸YMCAからの参加者がなかったので、「神戸 YMCA からも参加者を」という気持ちを強く持ち、参加に至りました。仕事の都合上、全行程の参加は叶いませんでしたが、それでもYMCAを通じて世界の人たちと働きをともにすることへの喜びは大きいものです。

プログラム参加にあたっては、中東諸国への渡航経験がなかったのですが、日本の派遣事務局である、日本YMCA同盟、在日本韓国YMCA、そして、過去の参加者の方々の報告やアドバイスがあり、心配はありませんでした。また現地の主催者からも案内が届き、質問に対しても適切に答えがありました。ただ現地の情勢がいつ変化するのかが予測できず、プログラムそのものが不催行になるのではないか、という不安は常にありました。

事前オリエンテーションでは、イスラエルの出入国が気をつけなければならない点であることを学びました。プログラムが始まってしまうと団体行動で現地スタッフも同行されるのですが、出入国だけは個人でしなければなりません。日本の派遣事務局、そして、主催者からのインフォメーションを忠実に守り、不安いっぱいでしたが、オランダ・アムステルダム空港乗り継ぎゲートと入国審査の質問攻撃を無事にクリアすると、とてもスムーズな出入国と手荷物検査でした。しかしこれは日本人でクリスチャン、加えてYMCAメンバーである私のケースであって、ルーツがアラブ諸国であったり、イスラム教信者、または、平和運動家である他の参加者は、それぞれ時間を拘束された出入国審査だったことを後々知ることになりました。

世界15カ国82名の参加者たちは、ホームステイをする人たちと、ホテル宿泊をする人たちと、2グループに分かれての行動でした。イスラエルの入植拡張で、自らのオリーブ畑での収穫が難しくなっている地元農民とともに、入植地に取り残されている畑でのオリーブ収穫です。収穫道具を積んでオリーブ畑へ向かうチャーターバスでは、車窓から見えるパレスチナの町、そして、イスラエルの入植地についての歴史や問題が語られ、とても学び多き、考える時間となりました。慣れなかったのは、バスが走っていて、「はい、ここまでがパレスチナ当局が管理する地域で、ここからがイスラエル当局の管理する地域です。」「ここは両局が管理する地域です。」と、1日に幾度も地域をまたぎます。2国を分離する壁には大きな鉄扉が設けられていたり、高速道路には検問所があるのですが、高速道路のトンネルをくぐったり、道路の脇にある黄色のコンクリートブロックを目印にしたり、よく見ていないと、説明を聞いていないと混乱します。ただ一目瞭然なのが、そびえたつマンション群や西洋風の家並み、青々とした街路樹がイスラムの入植地であり、屋根の上に水タンクが並ぶ地域や土肌の見える土色の土地がパレスチナでした。

オリーブ畑では、農家の人からオリーブ獲りを学びます。偶然にも学校教員のストライキで休校となった子どもたちも加わり、子どもたちの歌声や笑い声も混じり、オリーブの

実が鈴なりになっている木に集い、豊かな実りを感謝しながらの作業でした。昼食は、農家の人たちの日常の食事を一緒にいただきながら、オリーブの木陰でひと時を楽しみました。参加者は老若男女で、自分にできる作業を自分のペースで手伝いました。脚立に乗って獲る人、落ちてきた実を袋やバケツに入れる人、実を選定する人、それぞれができることをしました。小柄な私は、オリーブの枝をくぐって、木の上のまで登り、下で待つ人たちに実を送りました。日中は陽射しも強く、木陰を探しながらの作業でした。長袖や帽子は必需品です。

訪れたオリーブ畑のひとつ、すぐ近くにはイスラエル軍の兵営がありました。私たちが収穫をしている時もイスラエルの兵士が畑のすぐ脇で行動を監視しています。また、畑を訪れ、収穫作業を中止させようとします。他のグループは、作業を 1～2 時間止められましたが、私たちのグループは現地スタッフと農家の人の対応で、作業を止められることはありませんでした。もし、これがパレスチナの人たちだけの作業だったら、確実に作業は中止です。インターナショナルグループが一緒だから続けられたのです。収穫した大量のオリーブを見ながら、もしかしたらこれらは収穫されないままだったことも想像しました。兵士たちは例外なく銃を携帯していました。日本で日常生活を送る上で、機関銃を見ることはありませんが、滞在中は何度も機関銃を見る機会があります。幸いにも掲げているシーンを見ませんでしたが、この光景が日常的であり、いつも緊張を強いられている人たち、そこで育つ子どもたち、歌声を響かせ、笑顔溢れる子どもたちの将来への希望、そして平和を願わずにはいられませんでした。

このプログラムは、オリーブ収穫のみならず、パレスチナの歴史や現状、難民キャンプ訪問、また、エルサレム旧市街地やベツレヘムの聖誕教会も訪れます。プログラムに参加した人たちは、パレスチナ人のおかれている環境や現状況を学び、そこでの日常生活を垣間見ることができます。私が見たパレスチナの市場は、さまざまな香辛料が並び、日用雑貨が所狭しと並べられ、人びとが行き交い、歩く私たちとも気軽に挨拶が交わされます。確かに人々が暮らしています。私たちと同じように普通に生活しているのです。その日常生活がいつ強制的に接収されるかわからない、私の想像を超える現状があります。パレスチナの紹介には、「テロリストが住む危険な国」と表現される機会があります。しかし、全員が危険人物ではなく、普通の日常生活を送っている人たちが住む国であることを私は伝えなければなりません。大変残念なことに、帰国した翌月、11 月 14 日、イスラエルからパレスチナ・ガザ地区への攻撃が始まり、両国に多くの死傷者が出ました。停戦合意されたものの、12 月上旬、国連総会でパレスチナが「国家」に格上げされた直後、イスラエルは入植計画を公示することを決めました。大きく報道されたのはここまでです。この後、日本の報道に取り上げられることが稀になり、自分でインターネットから情報を得なければならなくなりました。今後も継続してパレスチナの子どもたちに平和と希望が訪れるように、関心を持ち続けたいと思います。また状況が許すなら、日本からの参加者が増えることを願います。